

Bentall 手術 28 年後に人工血管表面から発生した仮性瘤に対し修復術を施行した一例

白井 裕貴¹、沼田 智¹、田中 千陽¹、浅野 樹¹¹東邦大学医療センター佐倉病院

(背景)人工血管を使用した手術の遠隔期に吻合部から仮性瘤が発生する事象は認められるが、人工血管壁そのものから仮性瘤が発生する報告は少ない。(患者)76 歳女性。48 歳時に大動脈弁輪拡大、大動脈弁閉鎖不全に対して機械弁を使用した Bentall 手術を施行された。術後経過順調であり、有害事象なく経過。外来で定期的に CT、心エコーフォローを受けていた。X-1 年に造影 CT にて上行大動脈の人工血管前面に造影剤の流入する Mass を指摘された。仮性瘤と診断し手術予定としたが、ワーファリンのコントロールがアルコール多飲のため不良であったため、INR コントロールを行い、再度 CT を撮像すると仮性瘤が血栓化しており、一旦手術を見送った。その後外来で定期的に CT フォローを行っていたが、1 年後に再度造影剤の流入を認め、手術適応と判断した。右大腿動静脈から人工心肺を開始し、胸骨正中中切開を行った。人工血管前面には結合組織に被覆された隆起があり、切開すると Gore-tex sheet が見えた。さらに切開すると新鮮な血栓が存在し、摘除すると人工血管表面に数 mm の亀裂が存在し、出血した。フェルト付き糸で止血し得た。術後経過順調。(考察)出血部位と手術記録を参照すると、人工心肺離脱時に人工血管に針を刺して空気抜きに使用した穴が原因と考えられる。(結語)人工血管表面から発生した稀な仮性瘤を経験した。人工血管部の止血は重要である。